

第一章 原始・古代

第一節 先土器時代

尾張の 先土器文化

尾張平野に分布する先土器文化の遺跡はその規模も小さく内容も乏しいのが現状である。資料のほとんどが地表面からの採集品によるものであるから、形態面による推考の域を出ない。

學術調査によつて遺跡の性格が明らかにされたのは、犬山市北屋敷遺跡一か所にとどまり、工事によつて地層の断面があらわれ、層位を確認しながら遺物採集がなされた大口町西山神遺跡以外は、地表面からの偶然の発見にかかわるものである。

尾張平野での遺跡分布は、平野の東北部に集中しており、立地は木曾川の乱流によつて開析された自然堤防洲上にみられたり、小牧面や鳥居松面といわれる洪積層の直上にみられる。扶桑町、江南市、一宮市方面は砂質土の堆積が厚い地域もあつて遺跡の発見が困難なためか一か所も知られていない。

犬山市では、富岡付近出土の斜刃器しゃばたや握斧状にぎりかきの石器は古色におおわれており旧石器とみられる。東部丘陵地帯にある入鹿池では、池面に突出した舌状台地の上や汀線にそつて先土器時代から弥生時代に至る遺物が散布している。先土器時代の石器はナイフ形石器、搔器さうき、石刃せきば、尖頭器せんとうなどできとくに搔器が多くみられ、典型的な石器が少ない。

表2-1 日本の石器時代区分

新石器時代(縄文時代)	約2,000年前～10,000年前
中石器時代(晩期旧石器時代)	約10,000年前～13,000年前
後期旧石器時代	約13,000年前～30,000年前
前期旧石器時代	約30,000年以上前

芹沢長介「先縄文文化」新版考古学講座3

羽黒の北屋敷遺跡では、洪積層の直上に包含された一群の石器がある。石刃、搔器、挟入石刃、尖頭器、石核、細石器など数十点があり、大口町の西山神遺跡とともにまとまりのある文化の様相を知ることができる。石器の剝離技術は瀬戸内技法とよばれた横剝ぎ技法による剝片が多く、先土器文化の終りごろの遺跡として把握される。

北屋敷遺跡よりもやや新しいと思われる遺跡には、犬山城の南西にのびた洪積台地の下で、人家が建てこんだあたりに石器の散布がみられる。立地としては、木曾川畔の好適地にあたるが採集点数が少ないために、遺跡の範囲や性格、内容は不明確である。

小牧市では小牧山の南斜面に細石器文化の遺跡がある。出土した石器は、チャートを原材料とした尖頭器、搔器、細石刃、細石核、ナイナブレイドなどである。

小牧山の南西にある織田井戸遺跡からは、基盤となつている洪積層の黄褐色土層から剝片、ナイフ形石器、石刃、搔器等が少量出土しているが、やはり先土器文化の終りごろの石器と考えられる。

春日井市の梅が坪遺跡は、洪積段丘の第三段めにあたる小牧面上に位置する。ここからは尖頭器を主体とする石器が採集されているが、典型的な資料に乏しく、遺跡の内容を充分把握できないが、尖頭器文化に属する遺跡とみられよう。

大口町では、後述のように大屋敷山間、秋田の北替地、南山、小口の西山神、仁所野などにみられる。このほか細石器文化の次に位置づけられる有舌尖頭器が、大口町や小牧市などで単独に採集されている。

大口町の 先土器文化

尾張平野の北東部は、新第三系の尾張丘陵と三段になった洪積台地と沖積扇状地に大別される。大口町は犬山市から小牧市にかけて分布する小牧面といわれた洪積台地の下部の鳥居松面に比定される洪積層と、大山扇状地の部分に分けられるが、その多くは、洪積層の上に沖積層がのっている。大口町の北部から南部にかけて東半分は、沖積層が薄く、耕土層、黒土層、礫層または、ローム層となり、西半分は砂質土の堆積が厚い。この堆積層の中には、先土器時代の遺物がみられず、弥生時代以後の遺物が多くみられる。

木曾川の旧河道にそった北部では、小開析谷が発達して帯状の谷面が水田地帯となり、南部では自然堤防が発達している。南北にのびた幾筋もの帯状の自然堤防州は畑や人家があり、後背湿地や旧河道は肥沃な水田となって変化に富んだ景観を呈している。これらの基盤はいずれも洪積層で赤土とよばれ、先土器時代の遺跡や遺物は、この層に残されている。

大口町における最古の石器は、敲打器文化にみられる握斧が出土しているが、年代的な位置づけの根拠に乏しい。また伴出石器もないことから推定の域を出ない。握斧の出土地は荒井、山間、仁所野、西山神などで地域的には、沖積層の薄い所に多い。ナイフを主とした文化に属する遺跡や遺物はみられない。石刃文化の段階では、西山神遺跡一か所だけである。

細石器文化では、西山神、南山、北替地など三か所に分布があり、組み合わせの道具を用いた生活が展開されていたことが確かめられた。

尖頭器では、有舌尖頭器と柳葉型尖頭器、広葉型の三種類がみられ、山間、丸、中原、狭間、宮浦、北替地、西山神など分布は多く尾張平野のうちでは、とくにめだった存在として注目される。

山間出土の握斧

大屋敷字山間で採集された握斧は物を打ち割るための道具として使用されたものである。しかし、この石器は、先土器時代にみられる形態や剝離に特徴があつて注目されるもの、出土状況における確実な層位と地質学的な考察による位置づけがなされなければ、どの文化に属するものであるか明確になし得ない。形態的に古くみられても、その裏付けが必要であるわけは、握斧が先土器時代の古い文化の時代から縄文文化にわたる長い期間に使用されたためである。山間出土の三点のうち一点は、剥片から製作された握斧とみられ、先土器時代のものとして有望視される。ほかの二点は、石器製作による剝離痕や整形の面で問題があり、確実性に乏しいが、木を割つたり、動物の骨をくだいたりする礫器と考えられよう。これらの三点はいずれも同一地点の採集である。

荒井出土の握斧

小口字馬喰島出土の握斧は、長さ十一・六センチメートル、幅六・一センチメートル、厚さ三・二センチメートルの剥片石器である。形状はやや変形しているが、物を打ち割るのに都合よくできている。側縁は、両面からの交互の打撃によって、鋸歯状の見事は剝離痕が残され、鋭利な刃となつている。さらに一方の縁辺は、数回の打痕が残されているもの、よく磨耗して鋭さがない。先端は尖り、基部はまるくなつており、両面ともども風化が進んで全面をパテナ(古色)がおおっている。石質は、サスカイト状の石質である。これは、表面採集のため、出土層位や原位置が不明のため、推定の域を出ないが、かなり古く先土器時代の握斧と考えられる。

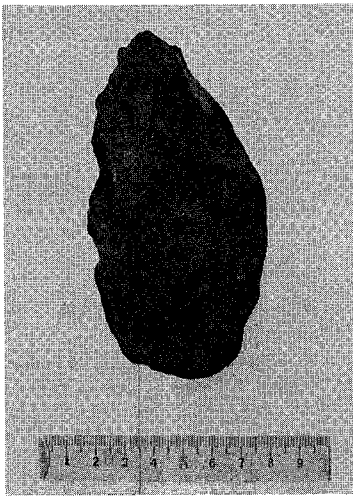


図2-1 荒井出土の尖頭器

表2-2 西山神遺跡の層序

層序	土質
第一層	表土層(砂質壤土)
第二層	黒土層(黒ぼくとよばれる第二次堆積の火山灰)
第三層	暗褐色土層(黒土層と黄褐色土層のまじり)
第四層	黄褐色土層(通称赤土)
第五層	礫層(砂と礫がまざっている)

西山神遺跡
遺跡は小口字西山神に所在し、現在は兼房刃物工業株式会社の敷地になっている。昭和三八年七月、工場用地として整地された折、発見されたもので整地前は周囲よりも高く桑園となっていた。ここは各所に黒土(黒ぼく)やローム層の赤土がみられ、木曾川の乱流や洪水の影響を受けることが少なく、また、東西の低地に湧水をみる格好の場所であった。

遺物は現在の工場敷地のほぼ中央付近で、直径約十五メートルの範囲内から、先土器時代の石器が集中して出土した。さらに東北端付近で、人頭大の河原石三個でかこつた炉址の中から、縄文中期の土器と、炉址の近くから定角型磨製石斧が発見されている。

これらの遺物を出土した地点の層序は、表に示したようである。包含層は、第三層と第四層で先土器時代の石器が、第二層からは縄文式土器が出土した。

出土した石器類は、第二層の黒土層の下部から尖頭器二点、石屑七点、第三層からは尖頭器二点、搔器七点、細石刃五点、細石核五点、彫刀二点、石核四点、石刃七点、挟入石刃三点、第四層からは斜刃割器三点、握斧状石器一点、礫器三点、石刃一点などが出土した。

石器は、目的をもって製作されたものであるから、用途に応じた形状や機能、製作技法、発達段階などがある。そして、それぞれの石器の編年の位置づけ、石器の組合せ、分布、自然環境、地質、伴存物、ほかの遺跡との関連など多くの問題をもってい

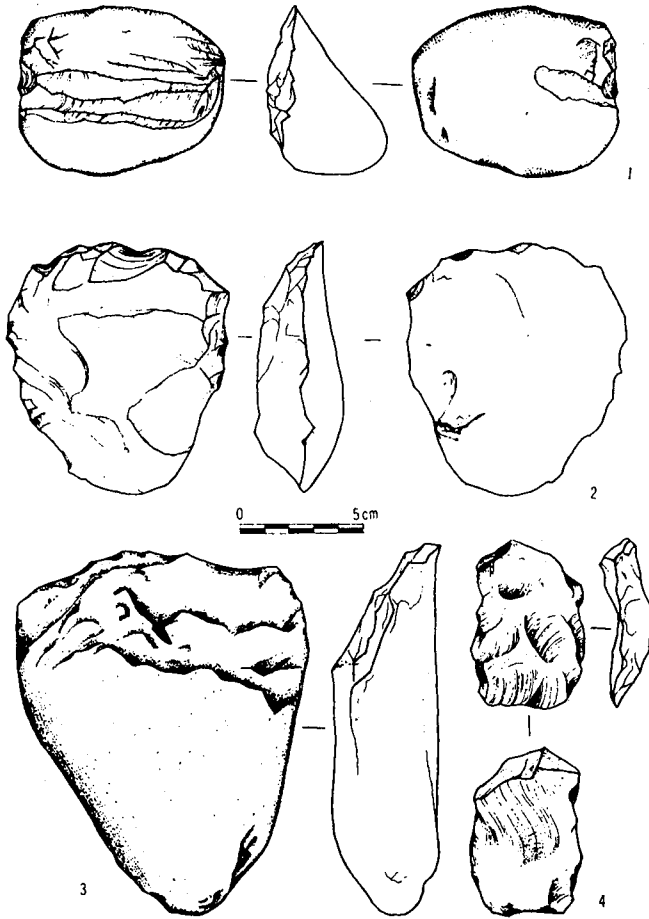


図2-2 西山神遺跡出土の旧石器1

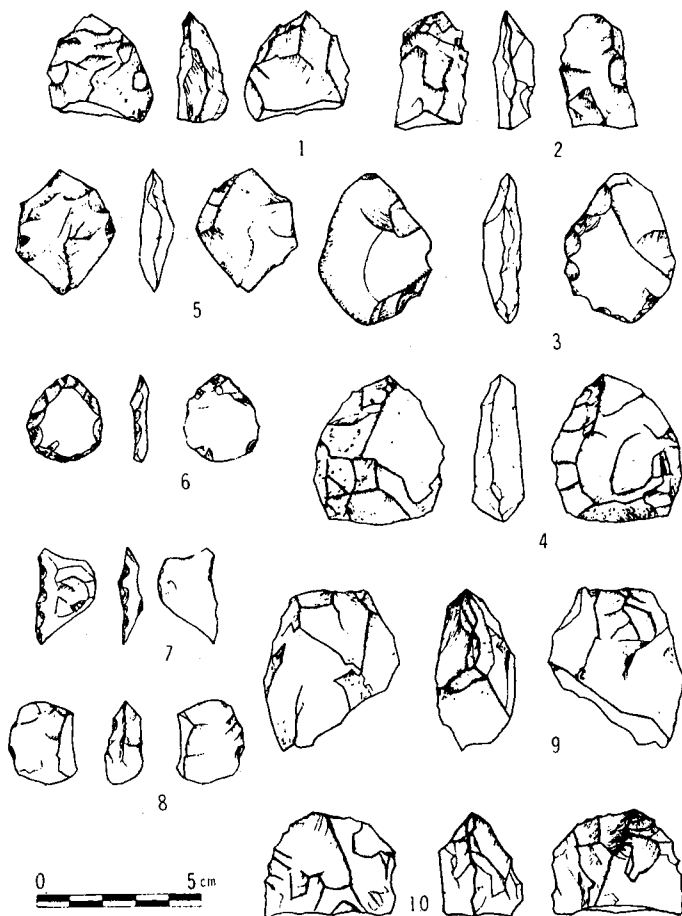


図2-3 西山神遺跡出の旧石器2

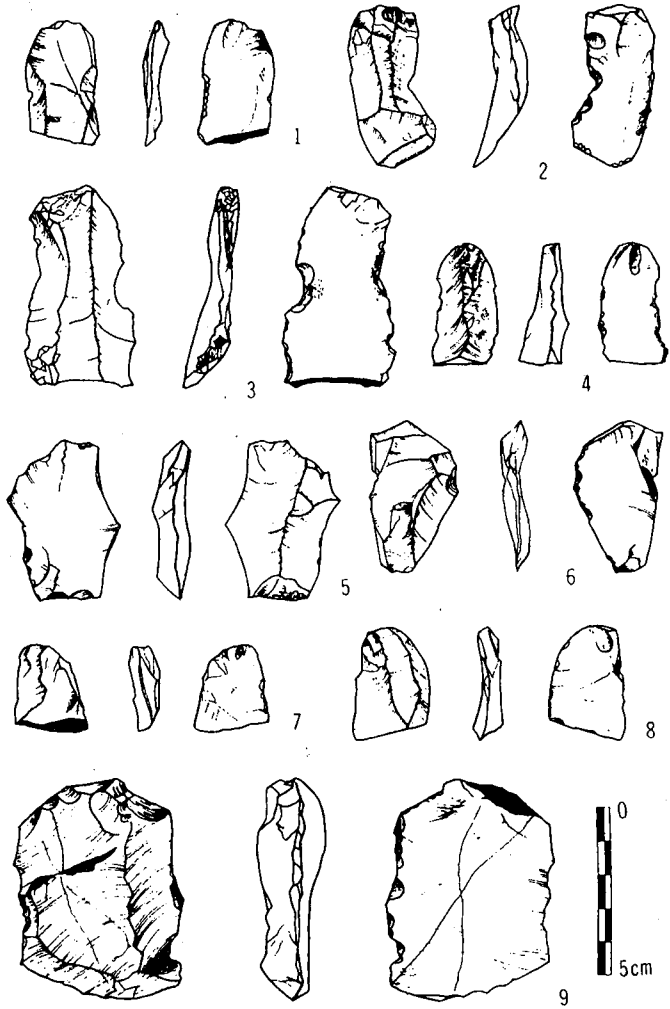


図2-4 西山神遺跡出土の旧石器3

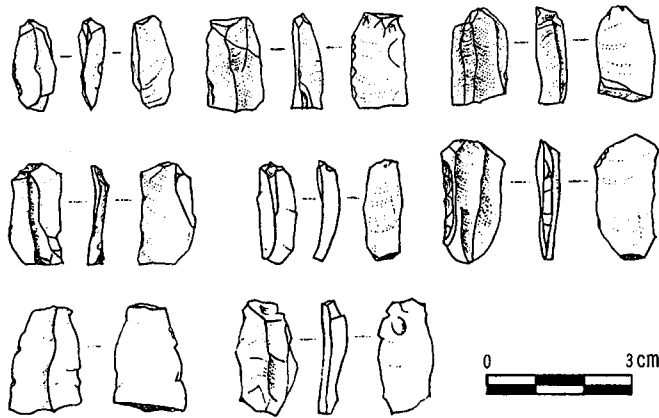


図 2-5 西山神遺跡出土の細石器 4

るが、ここでは石器のもつ形状と用途程度にとどめる。

尖頭器（ポイント） 先の尖った刺突の役目をするもので多くは槍先の意味にとられる。製作手法によって両面加工と片面加工、その中間的なものなどがあって、形も柳葉形、月桂樹葉型、有舌形、三角形、菱形、広葉形等の種類がある。西山神遺跡では、広葉形で両面加工と片面加工の二種類と半製品がある。

細石器（マイクロリス） 小形の石器をさし、組合せ器具としての幾何学形細石器と細石刃の二通りの組成がみられるが、日本では細石刃が一般的に分布している。本遺跡出土の細石刃（マイクロブレイド）は五点あるが、幅一センチメートル内外、長さ二〜三センチメートル程度の硬質頁岩製である。また菱形や台形状の石器もみられるが、これらは骨や木の棒に溝を掘りつけ、そこへ数個ないし十個程度を植え込み、刺突の効果をあげるようにしたもので、組合せの道具である。

細石核（マイクロコア）は細石刃を製作するときの基材となるもので、どんな刃器を製作したかを知る手がかりとなるものである。刃器を剥ぎ取る技法によって、瀬戸内技法、湧別技

法などに分けられ、それぞれの分布圏をもっている。形は、円錐形や舟底形をしたものが多い。本遺跡では、円筒形の細石核と長野県諏訪湖底、曾根遺跡出土の曾根型石核に近似した細石核を出土している。

これらは、地域によつて技法、形態、組成が異なり、それぞれ遺跡の独自性がよく残されている。細石器は、洪積世最末から沖積世初頭、実年代約一万年前後の特徴的な石器として注目され、尾張平野では四遺跡が分布している。

彫刀（グレイパー） 剝片または石刃の先端に截切つたような面を意図的に作り出したもので、これを彫刀刻面とよび、その部分に打瘤（バルブ）や陰瘤（ネガティブバルブ）がみられる。彫刀の刃先は手ノミ形と丸ノミ形の二種類あるが、用途によつていろいろな彫刀が作られた。本遺跡出土の彫刀は、多面体彫刀に類似したチャート製のものがある。

搔器（スクレイパー） 刃部が片面から急角度につけられており、ものを削つたり、あるいは搔くための道具である。形態は種々雑多で刃部の位置によつて、エンドスクレイパー、サイドスクレイパー、コアースクレイパー、ノッチドスクレイパー、ランドスクレイパーなどがある。西山神遺跡では、エンドスクレイパーとサイドスクレイパー、ランドスクレイパー、ノッチドスクレイパーなどがみられる。

石刃（ブレイド） 小刀の身の意味である。原材料の石核から剥ぎ取つた縦長の剝片で、その長軸にそつて二条か三条の稜線がおつたものをいい、長さは五〜七から十センチメートル前後、幅も二〜三センチメートルのものである。刃器製作の技法は、石塊の周辺を打ち欠いて形を整え、刃器の剝離しやすい円錐形の核を作つて、それから連続的に薄く幾枚も剥ぎ取る技法で、これを刃器技法とよび、剥ぎ取つた剝片を刃器または石刃、残つた核を石刃核（ブレイドコア）という。西山神遺跡の石核は典型的ではないが四点、石刃も七点出土している。

第1節 先土器時代

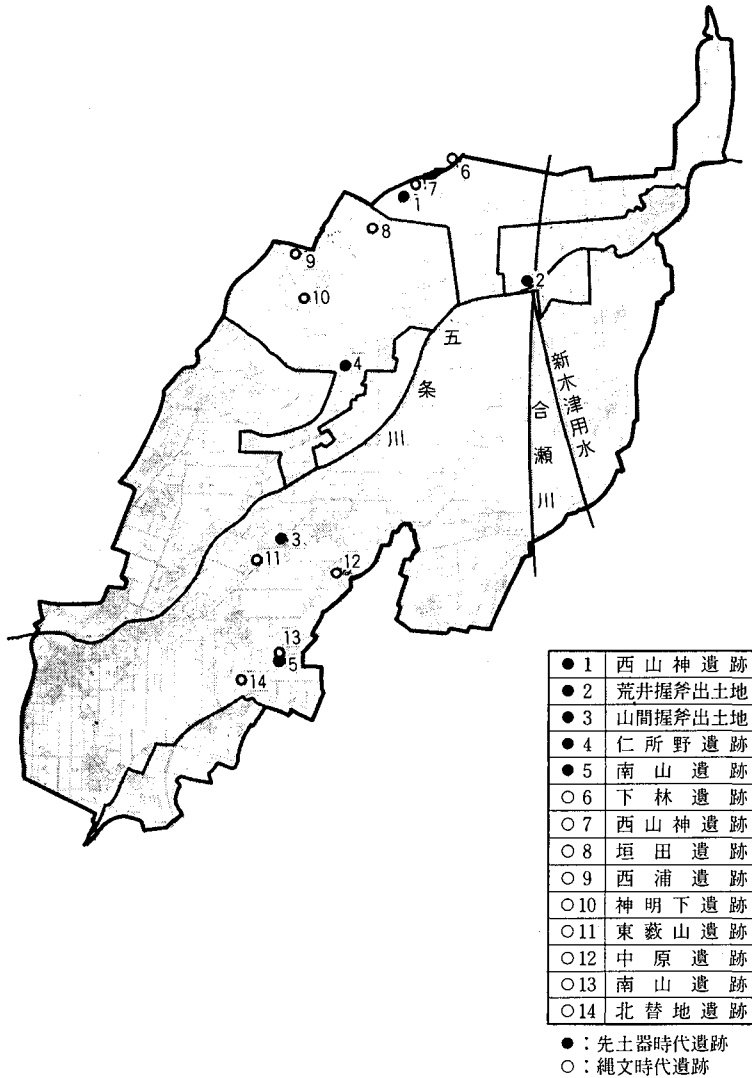


図2-6 先土器、縄文時代の遺跡分布図

礫器 河原石の一方の端に刃をつけたただけのもので、片手では持ちにくいものや、ちよど手頃のものなどがある。礫器は自然面を多く残したもので、片刃または両刃の粗製のもの、精巧な握斧状のもので、鶴嘴状のもの、鉞状のもの、円盤状のものなど多種多様である。機能は現在の斧に似たもので、たたいたり、打ったり、削ったり、裂いたりする場合に使用され、石も硬度の高い石材を用いている。

西山神出土の礫器は、硬質頁岩や安山岩を使い、片刃をつけただけの自然面を多く残した粗製のもので、扇状に九十度近く開いたもの、礫の一端を片面から一方的に打ち欠いた拳大のもの、剥片を利用して片面全部を調整し、裏面を大きく一撃して剝離痕を残すものなどがある。

中でも斜刃割器(チョッパー)とよばれるノミ状の刃をもった石器があつて、全面がよく風化し、古色におおわれている。これは、この遺跡出土の石器のうちもつとも古いと考えられる。

このような先石器時代の遺跡は、中部山岳地帯や関東、北海道に多く、研究も進んでいるものの、愛知県では十指余りの遺跡分布で、当時の様相を充分知り得ないが、先石器文化の終り頃から土器発生の時代にかけての過渡的な時代には、すでに尾張平野に人々の生活が営まれていたことを立証する西山神遺跡の持つ意義は大きいといえよう。

有舌尖頭器

細石器文化の終末ごろ出現したと考えられる有舌尖頭器は、ものを突いたり刺したりする目的をもち先

と柳葉型

端を鋭く尖らせた石槍先である。分布は、中部地方が濃密であり、ほぼ全国的にみられる。尾張平野で

尖頭器

は、犬山市、春日井市、瀬戸市、小牧市、大口町など東北部に集中してみられる。なかでも大口町の出土例がもつとも多い。

愛媛県の上黒岩岩蔭遺跡の調査では、有舌尖頭器に隆起線文をもつ土器が伴出したことから、細石器文化よりも新

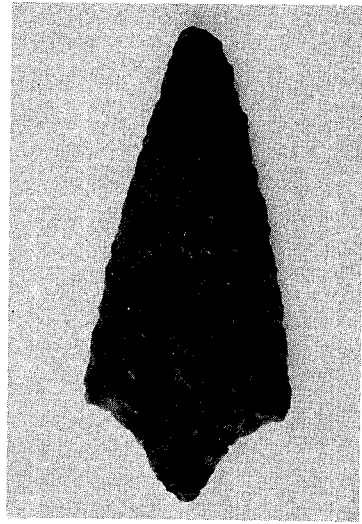


図2-7 有舌尖頭器
(豊田字西河原出土)

しいと考えられるようになった。この有舌尖頭器は、地域によりその様相に差異がみられるが、概して、細石刃文化と縄文文化の間を埋める石器としてとらえられる。地質年代の洪積世末から沖積世初頭の地層中に包含されていると考えられるが、尾張東北部一帯から出土している十例は、すべてが地表から単体で採集され、確実な層位とか伴出物もみないものである。大口町内出土の有舌尖頭器とともに石鏃が採集されているものの確実な伴出石器とは認められない。

この有舌尖頭器のほかに、町内では柳葉型の尖頭器が出土している。用途はやはり、突いたり、刺したりするなどであるが、地表からの採集のために所属文化の位置づけが判然としない。おそらく有舌尖頭器よりもやや時代があとで、土器出現の前後の所産とみられる。北替地遺跡では、早期の押型文土器に伴って出土した例がある。

〔秋田字中原出土の有舌尖頭器〕長さ七・九センチメートル、厚さ九ミリメートルのチャート製である。調整剝離はやや乱れがあり整然としない。身部にくらべ舌部がやや短い。付近からは、搔器や剝片石器若干と多数の石鏃が採集されている。

〔秋田字北替地出土の有舌尖頭器〕上半分を折損している赤色チャート製。残存部の長さ三・五センチメートル、厚さ五ミリメートル、身幅が一・五センチメートルで舌部が幅広く作られ、平行剝離による調整がなされている。

〔豊田字狭間出土の有舌尖頭器〕二本あってともにチャート製である。一本は、長さ六・七センチメートル、厚さ六

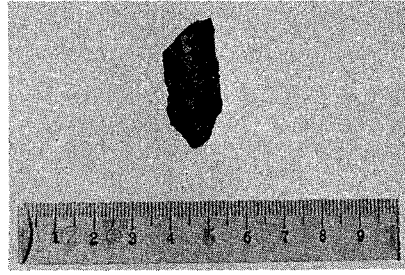


図2-8 北替地付近出土の尖頭器

ミリメートルで整然とした並行剝離がみられる。他の一本は調整や舌部のつくりが粗雑な面がある。

〔大屋数字山間出土の有舌尖頭器〕長さ六・二センチメートル、厚さ八ミリメートルで形態が整っている。全面に磨耗がはなはだしいが、並行剝離による調整が両面にされている。全面がパテナ（古色）におおわれたサヌカイト状の石質でつくられている。〔大屋数字丸出土の有舌尖頭器〕上半分を欠失している。残存部の長さ四・三センチメートル、厚さ七ミリメートルのチャート製で、両面とも押圧剝離が浅い。基部の調整は良好で薄く仕上げられている。

〔秋田字宮浦出土の柳葉型尖頭器〕長桜の天神社付近で二本採集されている。

第二節 縄文時代

縄文遺跡の分布

尾張平野北部における縄文時代の遺跡の数は少なく規模も小さいものが多い。これは木曾川の乱流や氾濫、入鹿池の堤防決壊などによる土砂の流失によって遺跡が破壊されたり、厚い土砂の堆積で発見が困難だったり、急激な開発で自然消滅したりしたと考えられる。あるいは、縄文時代の狩猟、漁撈、採集などが根本的な生活基盤であったことから、それを満たし得る条件を欠き、縄文人の活躍が十分でなかったために遺跡の分布が薄いかも知れない。